

三宅島の火山活動に関する火山噴火予知連絡会統一見解

三宅島では、多量の火山ガスを山頂火口から放出する火山活動が続いています。

10月以降は、噴煙が連続的に噴出されているものの、顕著な噴火は発生していません。火口近傍を除き、降灰もほとんど認められなくなりました。

火口内の噴出口の表面温度は12月まで上昇し、12月下旬に400℃近い高温が観測され、これに伴い夜間には火映現象も観測されました。しかし、火映現象は1月下旬には観測されなくなりました。

7月に始まった三宅島の収縮を示す地殻変動は鈍化しましたが、わずかながら続いています。9月以降、火山性地震の回数は少なく、火山性微動の振幅も小さい状態です。一方で、数は多くないものの、1月下旬には浅部で低周波地震が発生しました。

山頂火口から噴出される噴煙の高さは数百～2000メートルで、二酸化硫黄の放出量は、9月以降、1日あたり約2～5万トン程度の高い値を保持しています。山麓でも、気象条件によっては、高い濃度の二酸化硫黄が観測されています。

火山ガス中の二酸化硫黄の起源は、大部分がマグマからの脱ガスによるものと考えられます。現在のところ、二酸化硫黄放出量の低下を示す兆候は観測されていません。また、地震波の減衰などから、マグマだまりの体積は10立方キロメートルを超えるという見積もりもあります。

多量の火山ガスを放出する活動は今後も続くと考えられますので、火山ガスに対する警戒が必要です。また、雨による泥流にも注意が必要です。